岩手県総合計画審議会
第２回岩手の学び・文化・スポーツ部会

（開催日時）平成 29 年 12 月 20 日（水）15：00～17：00
（開催場所）岩手産業会館　７階　４号会議室

１　開　会
２　議　事
（１）報告事項
「第 81 回岩手県総合計画審議会及び第１回部会（11/8 開催）」時に出された次期総合計画に関する主な御意見等について
（２）協議事項
現状と課題、今後の方向性について
（３）その他
３　閉　会

出席委員
浅沼道成部会長、五十嵐のぶ代委員、伊藤昌子委員、鎌田英樹委員、
恒川かおり委員、熊谷雅英委員

欠席委員
青木幸保委員、早野みさき委員

１　開　会

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　ただいまから総合計画審議会第２回岩手の学び・文化・スポーツ部会を始めたいと思います。

私は、事務局を担当しております政策推進室の田澤と申します。暫時進行役を務めますので、よろしくお願いいたします。

まず、議事に入ります前に本日の審議の概要、進め方について私のほうから御説明いたします。恐縮ですが、座って説明させていただきます。

それでは、資料１を御覧いただきたいと思います。本日のこの部会の審議の概要についてということで、まず議事の１として報告事項、11 月８日に開催いたしました総合計画審議会と第１回部会で出されました御意見について、事務局から御報告いたします。特に、ほかの部会でどういった意見が出されたのかといったところを情報共有しながら議論を進めたほうがよろしいかと思いますので、そういった点につきまして御報告いたします。

議事の２では、協議事項といたしまして現状と課題、今後の方向性について委員の皆様から御意見を頂戴したいと考えております。事務局から、資料について簡単に御説明いたします。その上で、この部会が担当する政策分野、教育、人づくり、文化・スポーツの関係ですけれども、そういった分野において、今後 10 年で取り組むべきことでありますとか、今後の方向性、施策の方向性などについて、委員の皆様から御意見をいただきたいと思っ

ております。資料にはその御活躍の分野というようなこともありますが、それ以外の点でも、例えば地域で暮らしていて日頃お感じになられていることですとか、そういった御意見を幅広く頂戴したいと思いますし、ほかの部会が担当するようなものについても御意見いただければ、ほかの部会につないで今後の検討に生かしていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

この第２回部会において、いただいた御意見については事務局で別途政策分野の展開方向といった形で資料を整理させていただきまして、次回２月 13 日の開催を予定しております第３回部会で、さらに議論を深めていただくということで考えております。

議事の３として、その他ということで、何かございましたら御意見を頂戴したいということでございます。

説明は以上でございます。

それでは、以後の進行につきましては浅沼部会長にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

２　議　事

（１）報告事項

「第 81 回岩手県総合計画審議会及び第１回部会（11/8 開催）」時に出された次期総合計画に関する主な御意見等について

○浅沼道成部会長　それでは、よろしくお願いします。

それでは、最初は、報告事項ということで、事務局から前回出された意見についての説明をお願いいたします。

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　それでは、資料２を御覧いただきたいと思います。タイトルに第 81 回岩手県総合計画審議会及び第１回部会時に出された主な御意見といったタイトルを付しております。

まず、１ページ目でございます。総合計画審議会の中では、（２）の個別分野の対応という中で、この部会に関連するものとしては障がいのある児童生徒への支援のあり方について検討が必要ではないかといったような御意見が出されたところでございます。

１枚おめくりいただきまして、２ページでございます。まず、「暮らし」部会で出された主な御意見を御紹介いたします。①の情報発信の関係ですが、これは各政策分野共通ということになるかもしれませんが、同じ県内にいても情報格差があるように感じるといったことや、県の政策について、なかなか知る機会がないような場合もあるので、その情報発信のあり方についても考えてはどうかといった御意見が出ております。

それから、前回の本部会でも子育ての関係で御意見をいただいておりますが、「暮らし」部会の中でも仕事と子育ての両立支援という点についての御意見が出ております。例えば、一番上のところですが、働いている親が仕事に加えて何かいろいろ関わろうと思っても、なかなか大変なため、そういったところへのサポートが大事ではないかといった御意見、それから上から３つ目ですが、子育てに加えて介護のいわゆるダブルケアで苦労している女性も多いと、そういった方々に対して寄り添った対応を考えていくことが必要ではないかといった御意見。それから、一番下は家族のありようというものも変化してきているの

ではないかというような御意見がございまして、寛容さや察するといったようなものがあると幸福感というのも向上していくのではないかといった御意見をいただいております。

それから、④の地域コミュニティの関係でございますが、人口減少が進んできている中で、これからは地域を越えた交流、例えば、地域を越えた助け合いについて考えていく必要があるだろうといった御意見、それから暮らしのゆたかさの関係ですが、今の若い人たちは高度成長のときの豊かさとは違う豊かさがあることを感じているのではないか、そういったところをパラダイムシフトできるような環境を整えていってはどうかといった御意見が出ております。

３ページ以降は仕事部会でございます。さまざま現状がどうなっているのかといった御質問をいただいておりまして、そのデータを列挙しておりますので、参考までに御覧いただければと思います。最初は、企業が求める人材について、どういった職種、仕事が求められているのかといったところで、例えば、サービス関係、専門的、技術的職業のウエートが高いといったようなところが回答のところにございますし、②では県内の高卒者、学卒者のうち、ブルーワーカーとホワイトワーカーの内訳であるとか、民間と公務員の内訳についての御質問があり、資料を整理しております。

４ページのほうは、Ｕ・Ｉターンの状況を整理した資料となっております。

５ページに行きまして、地域の産業の関係につきましては、報道などでもいろいろ言われていますが、人手不足の関係についての御意見が出ておりまして、例えば、５ページの下から２つ目の箱のところでいうと、旅館業の関係もかなり人手不足が深刻であり、外国人の方が東北にも来ていただいているのだけれども、おもてなしをしようにもなかなかそういった人材の確保というのが難しくなってきているといった御意見が出されております。１枚おめくりいただきまして、６ページですが、その働き手の不足をどう乗り越えていくのかといったところでは、ＡＩやＩｏＴといったことは避けては通れないだろうといった御意見や働き方改革も含めて考えていく必要があるといった御意見をいただいております。それから、高齢化も、これはもう進んでいくということで、いかに幸せに年をとっていくのかという課題認識も持つ必要があるといった御意見をいただいております。

それから、（３）は本部会の御意見ですので、説明は省略いたします。

７ページの中ほどを御覧いただきたいと思います。（４）の「若者」部会でございます。若者部会では、どういったテーマで議論を進めていくのかといった形で議論が進みまして、１つは新たな働き方を考えてはどうかということで、首都圏に一回出ていった若者の自己実現できる仕事があれば、やはり岩手で活動したり、仕事をしていきたいと考える人もいるはずだということで、例えば、副業を持つといったダブルワークであるとか、フリーランスのような仕事の働き方についても考えていくことが大事ではないかという意見がございました。

それから、③ですが、岩手だからこそできる若者の仕事だとか、暮らしが見えてくるといいのではないか。それから、一番最後の箱のところでは均衡ある国土の発展が進められる中で、岩手でもよくある景色だとか、よくある郊外地域が増えているので、岩手のエッセンスを踏まえたもの、そういった岩手に関わる人を増やしていくことが必要だといった御意見をいただいております。

最後の８ページでございますが、これも冒頭に少しありました、若者に対するＰＲ方法

についての御意見ですが、県庁のＰＲの仕方というと岩手、岩手ということがすごく前面に出ているのだけれども、そのように言われると若者には逆に響かないということで、ＰＲの仕方を工夫してはいかがかといったような御意見を頂戴したところでございます。
説明は以上でございます。

○浅沼道成部会長　これにつきましては、次のメインとなりますテーマの参考になるものと思いますので、何かあったらその都度御質問なり意見を述べてもらえればと思います。よろしいでしょうか。

「はい」の声

（２）協議事項
現状と課題、今後の方向性について

○浅沼道成部会長　では、早速今日のメインテーマの議論に入りたいと思います。
県から、まず資料について説明をいただいてから議論、意見交換をしていきたいと思います。

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　それでは、資料３、資料４と追加資料という１枚ものの資料を一括で御説明したいと思います。かなりの分量ですので、簡潔に御説明いたしますので、御了承いただきたいと思います。
まず、資料３でございます。こちらについては各政策分野における現状を分析した資料ということで、庁内の関係部局と検討しているものでございまして、タイトルにもありますとおり今たたき台ということで、まだ検討途上のものでして、本日の部会でいただいた御意見も十分に踏まえまして、さらに検討を深掘りしていきたいと考えているものでございます。
大きく政策とすると教育・人づくり、文化・スポーツと分けております。１枚おめくりいただきまして、まず教育・人づくりの分野でございますが、これをまた１の児童生徒の教育から３の多文化理解・国際交流まで大きく３つに分けて資料を作成しております。
２ページをお開きいただきたいと思います。こちらの資料ですが、それぞれのテーマごとに強みと弱み、それからチャンスとリスクを分析したもので、今後の検討材料とするため作成したものでございます。例えば、児童生徒の教育のうち、確かな学力・豊かな心・健やかな体の育成といった部分でいうと、強みとすれば授業の内容がわかると答える児童生徒の割合が増加していること、それから②にありますけれども、これまでの教育振興運動の取組による基盤があるといったところを挙げております。
一方で、弱みとしましては、中学校の数学の関係が全国平均を下回るなど、③にありますとおり、大学進学率が全国的に見るとまだ低いといったようなところを挙げております。
チャンスとしましては、右上のほうですが、①にありますとおり、やはり人口減少ということで、人材育成の重要性というのは増大してきているということ、それから③の幼児教育の充実であるとか、④の道徳教育の充実といったところを挙げております。
一方、リスクとしましては、②にありますとおり、児童生徒数の減少に加えまして、家

庭の経済的な格差の問題、それから、③にありますとおり、スマートフォンの関係ですとか、情報モラルの問題が出てきているということで整理をしております。

また、１枚おめくりいただきまして３ページでございます。下の復興教育、キャリア教育の関係でございます。強みとすると岩手の復興教育が定着してきているというところを１番に挙げておりますし、②ではキャリア教育の関係の取組も進んできているといったところを挙げております。

一方で、弱みといたしましては、キャリア教育の関係で高校生や保護者に対する県内企業に関する情報が十分ではないのではないか、親御さんも含めてかもしれませんが、高校生が県内企業のことを知らないといったところを挙げております。

一方で、チャンスとしましては、⑥にもありますとおり、例えば、デンソーや東芝の関係など、新たな動きも出てきておりますので、これから産業人材の需要というのは増大していくといったところを挙げております。

リスクとすると②にありますとおり、学校統廃合などもございますので、学校と地域の連携の在り方というところを考えていくポイントということで挙げてございます。

また、１枚おめくりいただいて４ページを御覧いただきたいと思います。上が地域から世界を俯瞰する視点を持った人材の育成ということで、強みとすると高校の英語の授業、教員の英語使用の割合が高いといった点を挙げております。また、理数教科の指導法の研究が進んでいるといったところを強みとして挙げておりますが、一方で弱みでは、①にありますとおり中高生の英語力が全国と比較するとまだ低調であるところ、それから⑧にありますとおり、海外留学などに参加する高校生が減ってきていることを挙げております。

一方で、チャンスとしましては、④にありますとおり、ＩＬＣの関係やラグビーワールドカップ、オリンピック・パラリンピックといった外国人、海外との交流機会が増大してきていることを挙げております。

また、１枚おめくりいただきまして５ページでございます。下段の学校における文化芸術の振興・文化財の保存と継承でございますが、強みとすると優れた実績がある学校であるとか、合唱や文芸コンクールの関係の指導者がいるといったもの、それから④にありますが、郷土の文化芸術や文化財を理解して継承しようとする風土があるのではないかというところでございます。

一方で、弱みとしますと、県内在住者 5,000 名を対象とした県民意識調査の結果では、文化・スポーツの重要度の低さや後継者・指導者が不足しているといったところを挙げております。

６ページでございます。特色ある私立学校教育への支援ということで、県内の私立高校生の大学進学率の増加が見られるといったところや多様な教育活動が展開されているといったところを強みとして挙げております。

弱みとしますと、安全に関わる部分でございますが、私立学校の耐震化が公立と比較すると進んでいないといったところや、教育環境整備に要する資金の確保が難しくなっているというところを挙げております。

チャンスとすると、国の教育費無償化の取組というものもございます。

リスクとしては、少子化等々の影響もありますが、入学者の減少に伴う経営の圧迫といったところが考えられると整理しております。

また１枚おめくりいただきまして、生涯学習・地域課題解決の関係ですが、生涯学習については県立の５つの社会教育施設で年間 60 万人以上の利用者がいるということ、市町村主催の講座にも約１万の講座に 74 万人が参加しているといったことで、活発に活動が行われているところを強みとして挙げる一方で、弱みとすると広い県土ということもありますので、県立施設が身近にないといった点を挙げております。

チャンスとしましては、⑤にありますが、リカレント教育に対するニーズが高まってくるといったところを挙げております。

１枚おめくりいただきまして、８ページでございます。高等教育機関との連携促進、大学関係の部分でございます。強みとしますと県内の各大学の特色ある教育研究が行われているといったところを挙げておりますし、自治体や各種団体と高等教育機関が連携した取組が盛んに行われているといったところを挙げております。

弱みとしては、②にありますとおり、大学進学者の多くが県外に流出している傾向がありまして、地元の定着につながりにくい状況ということで、県内各大学の状況を整理しております。

チャンスとしましては、国による地方大学の振興に関する新たな施策といったところを挙げておりますし、④では、将来は岩手県内で働きたいと思っている高校生の割合が 70％程度と比較的高くなっているといったところを挙げております。

また、１枚おめくりいただきまして、９ページでございます。多文化理解、国際交流の関係ですが、これは世界遺産に代表されるような豊富な観光資源もあるということやグローバル人材の育成に向けたさまざまな取組を展開しているといったところを強みとして挙げております。弱みとしますと、まだ地域の国際化に対する理解が十分ではないのではないかということや市町村における国際交流団体の体制がまだ弱いところがあるのではないかといったところを挙げております。

強みとすると、ラグビーワールドカップやオリンピック・パラリンピックの関係などの世界規模のイベント開催を契機とした交流人口の拡大が今後見込まれるのではないかというところを挙げております。

一方で、リスクとしますと、例えば人口減少、少子化ということで国際交流の担い手が減っていくのではないかということや生活環境に適応できない外国人が増えていくのではないかといったところを挙げております。

10 ページ以降は、文化・スポーツの分野でございまして、文化芸術とスポーツ振興に分けて整理をしております。

11 ページをお開きいただきたいと思います。強みとしますと、国体、希望郷いわて大会のレガシーがあり、それらを生かした取組が必要だといったところを挙げておりますし、活発な文化芸術活動ということで、民俗芸能、あるいは若者の活躍、漫画だとか、そういった新たな取組、アールブリュットの関係といったものを挙げております。

弱みとしますと、県民意識調査の結果における文化関係項目の重要度が低く見られているといったところがございます。

チャンスとしましては、先ほど御説明いたしましたように、①、②の世界的なイベントとの関係、それから⑤の歴史・文化をテーマとした観光の拡大というのが最近見られますので、そういったところを十分検討していく必要があるということで整理をしております。

１枚おめくりいただきまして、最後はスポーツ振興でございます。強みについては、同じく国体等々のレガシーの関係、それから本県の自然環境や高規格のスポーツ施設の存在というものがある点や、⑦では総合型地域スポーツクラブが普及してきているといったところを挙げております。

弱みとしますと、こちらも県民意識の中では、スポーツ関係というのはそれほど重要度が高くないといったところ、スポーツ関連市場が小さいといったところを挙げております。

チャンスについても同じくラグビーの関係やオリ・パラの関係、あるいは⑤にありますが、アクティブシニアがこれから増加してくるだろうというところを挙げております。リスクとしますと子供、若者の減少、それからスポーツ推進員が高齢化しているといったところを挙げております。

資料３の説明は以上です。次に資料４を御覧いただきたいと思います。こちらの資料は、縦軸に 12 の幸福の要素、また、仮置きでございますが、横軸に政策の柱を置き、それぞれの施策が幸福の要素にどういう影響を持っているのかということを分析したものです。これもまだ検討段階の資料でして、これからさらに本日の御意見もいただいて練り上げていきたいと考えているものでございます。特に関連が強い項目には二重丸を、関連がある項目は丸を付しております。新規の取組には下線を付しまして、新たな取組の視点といったものも整理をしております。例えば、健康の要素に対して、どういった施策が影響しているのかということで、教育の分野でいきますと、子供たちの健やかな体の育成というところがあると思いますし、スポーツ振興の中でも県民がスポーツに親しむ機会の充実といったものが幸福、健康の要素に影響するだろうといった形で整理したものでございます。

少し飛んで８ページを御覧いただきたいと思います。仕事の要素ございますが、こちらは当然産業、観光、雇用の分野が大きく影響するわけですが、例えば、教育の分野では、一番上のところにありますとおりキャリア教育などの取組が大きく影響を及ぼすだろうと想定しております。それから、２の中ほど、生涯学習・地域課題解決のところでいうと、産学官の連携強化の取組、大学と自治体、企業が一体となった若者の支援といったところが重要だろうと整理をしております。

次に、13 ページをお開きいただきたいと思います。コミュニティの施策については、教育の分野でもさまざま影響を及ぼす施策があるということですが、文化芸術振興のところで、下の文化芸術による地域活性化といった観点の施策があるということで、国内外に向けた本県の文化芸術の魅力発信だとか、文化芸術を生かした交流人口の拡大といったことが施策として考えられますし、スポーツ振興ということでは、障がい者スポーツの振興やスポーツによる地域の活性化といった視点からの施策といったものが重要だろうということで整理をしております。

15 ページをお開きいただきたいと思います。15 ページは、教育の要素についてということでさまざま施策はあるわけですが、教育・人づくりのところでは、学力の育成に始まりまして、豊かな心の育成といったところ、例えば、豊かな心の育成については、新たな取組の視点としては政治的教養ですとか、社会の諸問題について考える授業等を拡充していくといったところを挙げておりますし、中ほどではライフプランニング教育の推進といったところ、少し下のほうに行きまして教育の機会の確保というものがございますが、ＩＬＣ誘致を踏まえると外国人の児童生徒が県南部を中心に増えてくるのではないかというこ

とで、外国人児童生徒の受入体制の整備といったことも重要になるだろうといったことで整理をしているものでございます。

17ページをお開きいただきたいと思います。最後に、歴史・文化の要素についてですが、教育の分野では文化芸術の振興を通じた人材の育成というのを一番頭のところに置いておりますし、下にありますが、地域における国際交流拠点の活発化といった視点の取組が重要ということで挙げております。文化・スポーツの分野につきましては、岩手に根づいた文化芸術を振興していくことに加えまして、新しい文化芸術の創造、アールブリュットの振興、スポーツ分野でもトップアスリートの育成やスポーツ医科学サポートの推進といったものが重要ということで整理をしております。いずれ、検討段階のものですので、本日いただく御意見を踏まえて、さらに検討を深めてまいりたいと考えているものでございます。

最後に、１枚ものの追加資料を御覧いただきたいと思います。次期総合計画の策定に当たりましては、県民の皆様から幅広く意見を伺っていくということで12月９日にその第１弾となる外国人県民の方との意見交換を行いました。その際に出た主な意見を御紹介いたします。出された主な意見としまして、例えば、１番目でありますが、いろんなイベントで交流するのも大事だけれども、もうちょっと力を入れないで、生活の中でもっと自然に交流できる場があるとよいといったような御意見、それから（３）、（４）にありますが、困ることも多いので、さまざま配慮をしていただければという御意見がございました。

それから、（５）では日本人が外国人に全て合わせる必要はなくて、まずは、外国人も努力する。ただ一方で日本人の方も外国人の文化だとか習慣を理解していただければといったような御意見がございました。

それから、（７）ではＩＬＣの取組などがあるわけですけれども、ＩＬＣが実現すれば世界最先端の技術だとか、科学に注目が集まると思うが、岩手にはすばらしい歴史や文化があるので、そういったものを大切にしていってほしいというような御意見をいただいております。

それから、(10) では、高齢化が進んでいく中で、岩手のスローな感じ、スローな空気というのは非常にいいのではないかと、そういうゆったり感や安心感、思いやりといった岩手のよさを東京や大阪との違いとすべきといったような御意見をいただいたところでございます。

説明は以上でございます。

○浅沼道成部会長　膨大な資料をありがとうございました。こういった岩手県が持っている価値みたいなものの現状を理解しながら、それを子供たちに残していくような、そのためにどのようなことを行っていけばいいのかというようなところや、あるいは、生涯学習など、そういった環境をつくっていくといったようなこと等々、いろいろな御意見があろうかと思いますけれども、それについて、今から時間は５時ちょっと前までということでよろしくお願いします。

基本的には今の資料４の幸福の要素ということでもあるのですが、本日の御発言がどの要素に入るかといったことは、後日、事務局が整理すると思います。そういった意味であまりそこは意識せずに、それぞれの立場から普段感じていらっしゃること等、現状あるい

は将来に向けて、10 年後の岩手に対するざっくばらんな御意見をいただきたいなと思います。どこからという指名はしませんので、今思っていることをまず早目に発言していただければと思います。

どうぞ。

○伊藤昌子委員　幸福の要素ごとに想定されるたたき台をすごく分厚くまとめていただきまして、御苦労さまでございました。これを見たときに、やはりジャンルごとに整理すると、どうしても行政というのは縦割りになるなというところをすごく感じてしまいました。したがいまして、これから 10 年を考えるときにこういうふうに医療なら医療というふうにくくるのではなく、もう横のネットワークを生かした連携でないとなかなか難しいのではないかと思いました。

第１回の部会の中で、暮らし部門の中で、仕事と子育ての両立というので、女性が働くという流れになってきておりますが、働きながら家事をするというとどうしても妻のほうに負担がかかってきていまして、そこで学力向上もということなると、さらに負担が大きくなることになります。子供の学力向上は、家庭と地域と学校との連携が必要と言われておりますが、家庭に時間のゆとりがないと家庭学習をしろといっても、結局子供にだけ負担がかかってしまいます。親が子供の学力向上にどう時間をつくっていくのかというところが今でも大変だろうなと思うのですけれども、そこで働き方という部分でもうちょっと男の人も女性も子育て、学力向上につながるようなゆとりのある時間配分を岩手県の中で設けていってあげられればいいなと、これを拝見していて思いました。

健康に関しても、学校に体力づくりとかを任せるのではなくて、乳幼児、未就学児から体を使って、全身を使ってバランスよく動くというのはすごく大事だと思います。健康のところで、急に健やかな体の育成が出てくるのではなく、やはりそれは小さいうちからの流れがあっての基礎体力づくり、運動、それからオリンピック選手にするという流れはあると思うので、そこの横の連携をこれからどうしていけばいいのかということをちょっと感じました。

○浅沼道成部会長　要するに全てベース、基本的な環境が整ってくれれば、今言ったことがいい方向に回り出すのだと思うのです。普通に生活ができていくという仕組みがしっかりできた上で学力だったり、あるいはそれが今地域だと思うのですが、地域がどれだけ豊かというか、そういう生活を支える仕組みが整っているかが大事になってくると思います。例えば、スポーツの話をしていると、やっぱり小さいうちから子供たちの遊べる空間をうまく地域が準備していくというようなものができていけば、自然にそれが回っていって、その中であるときに才能がある子は引っ張り上げられてオリンピック選手になっていくというふうなことで、やっぱりベースが一番普段の生活の中で重要なことだと思います。今出た御意見に対してでも構いませんし、あるいは新しいことでも構いませんのでどなたか御意見のある方はいらっしゃいますでしょうか。

どうぞ。

○五十嵐のぶ代委員　今伊藤委員さんが子育て・女性に関してお話しされたのですが、私

は下の子を生んでもう 15 年経ってしまっているので、新生児や乳幼児に関する情報というのに疎い年代になってきています。最近、この二、三年、市役所の住民課の窓口に行って感じることがあったのですけれども、結婚したら、夫婦はこうあるべきという資料、パンフレットに一生涯女性も男性も働くというスタンスで一緒に暮らしましょうというメッセージが書かれていたり、子育ても一緒にやりましょう、家事も一緒にやりましょうといった、要はイクメンを推奨する文言が書かれておりました。時代は変わったものだなと感じる一方、「母子手帳」という言葉自体もう時代遅れかなと。そして、今実際にそういった推奨される部分があり、お父さん方もかなりＰＴＡ活動や子供会活動にも参加するようになりましたが、やっぱり乳幼児のころのお母さんの負担というのは大きいので、そこを国民全体にも周知していって、今の時代は昭和と違うのだよということを知らせていただきたいなというふうに強く思います。

実は今日の午前中、校長先生方と打ち合わせする機会がありまして、その中で今の高校のあり方ということで、県外から受け入れる体制づくりの話をしてきたのですが、日本全国の人口というのは余り減っていない、激減はしていないけれども、少子化に関わる問題として、子供たちに関してはもう学校現場ではかなり少なくなってきているのが現状です。子供たちが少ないということは、将来税金を納める人たちが少なくなる。様々な危機に発展していくことにもつながっていきますが、第２次ベビーブームで２番目に人数の多い年代の私たちくらいの年だと子育てが終わっている方々が多いため、実際学校教育とは何なのだとしたときに、意識がどんどん薄れてきてしまいます、危機感を持っている人数がどんどん減ってきているような状況になっていると思うのです。そのことを日本全国に知らせて、皆さんが子供たちを育てる県にするためにはどういうふうにしたらいいかということを現場サイドの人とか、子育てに携わっている人だけではなく、お年寄りとか大人たちも一緒に考えられるような意識に変えていかなければいけないなというふうに強く感じております。

○浅沼道成部会長　教育ということですけれども、基本的に、先程の話の中で、昭和的な考え方、資料の中にもありましたが、意識を変えていかなければならない。未だに昭和的な考え方を守っているのは一体誰というところも感じています。私は学生とずっとつき合ってきていますが、学生世代の価値観や考え方が相当変わってきているのを感じます。意識の改革、県民の中でいろんな意識があると思いますが、いい意味で岩手県は保守的な、非常に伝統を守るとか、石橋をたたいても渡らないという資質があり、それはそれでよさなのだけれども、でもそれをどこかで変えていかないとまた同じように繰り返していくというふうに思います。結局政策の中でも同じことで、どちらかというと守ってきているところが多いと思うのですよね。その辺のところ、今回のこの計画にどれだけ盛り込めるかどうか、本当に大胆な提案あってもいいと思うのです。きちっとお仕事をされるというのは岩手県の気質に現れるように、非常にきれいにまとめられた計画というのもいいことだとは思うのですけれども、遊び心が欲しいですね。知事さんが一番そういう心があるようにも思います。

先ほど情報発信の話があったかと思いますが、具体的にはどのような内容でしょうか。

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　若者部会では、今の若い人たちに響くやり方というのがやっぱり県庁の人はわかってないのではないですかといったお話がありまして、例えば、ＳＮＳを使った情報発信ですと、若い人はフェイスブックは使っていませんよとか、やっぱりラインですよと、メールアドレス持っていない学生さんや若い人が結構多いので、ラインをうまく使うとか、そういった新しい手法をもう少し県は考えるべきといった御意見が若者部会では出されました。

○浅沼道成部会長　どうぞ、鎌田委員さん。

○鎌田英樹委員　ただそれは手段の問題なのでしょうから、根っこにあるところで、やはり家族制度もそうですし、働き方もそうですけれども、私はあまりにも時代に迎合し過ぎて先走り、若い子はこうあるべきだ、時代は変わっているから、グローバル化だからといいながらも、遠い将来にはそういう世界というのは大切かもしれないですが、今ここにある例えば 15 年とか 10 年ということに最初にそういうデザインをつくって、それにあわせてみんながというのは果たしていいのだろうかと、私はそう思います。

成功事例の積み重ねでいいと思うのですが、子育てでも、教育でも、あるいは働き方でも何か一つずつ工夫をしながらというか、言い方が若干アバウトなのですけれども、その中で成功事例をつくっていって、トータルで見ると岩手って変わってきたねというふうにしたほうがわかりやすい、私なんかは腑に落ちるなとは思うのです。初めからその大上段に岩手は幸福の指標があって、この方向性で示す教育、仕事、健康といった形できっちりと決め込まれると何か窮屈な感じがしているなというような個人的な感想を持ちました、最近の議論の中で言いますと。

全然今の議論と違うかもしれないですけれども、弊社が主催したわけではありませんが、岩手県内のボランティアの方々が始めて今回３回目になりましたヤングフェスティバルというものがございます。小学生から高校生ぐらいまでの本当に若い人たちが学んだことを、その人たちが発表の場がないと。だから、学んでもそれを発表することがなければやりがいにもつながらないし、さらに励んで上を目指そうという気にならないということもあって、そういうふうにジャンル問わずに音楽からスポーツまで含めて、ピアノや歌、民謡など、地元の芸能を含めて習っている若い子たちが、そこの地域だけではなくて、岩手県でやりながら少し誇りを感じていけるようなイベントが開催されております。今回は３回目だったので、割と人も入っておりまして、やっぱりやっている人たちはやりがいを感じるので、さらに上を目指そうということのようです。それがひいては、世界を目指すことにつながりますが、世界を目指すために、グローバルのためにやるのではなくて、やりながら少しずつ上というか、自分なりの目標が高まっていくというような肩に力を入れなくてもいいのかなというふうに思ったイベントでした。あくまでも参考までということではございます。

○浅沼道成部会長　はい、どうぞ。

○伊藤昌子委員　今のお母さんたちは、コミュニケーションをとるよりはインターネット

で子育てをすごく調べるのです。やっぱりまじめで人に迷惑かけたくないという子育てしておられるような感じです。

五十嵐委員が言ったようにあるべき姿という感じで、子供もそういうふうに育っていってしまうような感じがするのです。岩手県民の皆さんはまじめなので、結局先生なら先生のあるべき姿、私たちの年代だったら、私たちのあるべき姿、お年寄りも、あるべき姿のようなものを勝手に決めつけてそうなろうとしているようにも感じます。また、資料３のリスクの欄には少子化、少子化とすごく出てくるのですけれども、もう岩手県は少子化とわかり切っているので、あえて入れないという考え方もあるのではないでしょうか。その代わり、幸福をどうしましょうといった感じで豊かな地域をどうつくりますかと、幸福な地域をどうつくりますかと言っていくことでおもしろそう、楽しそうと感じてもらえるように持って行けたら岩手県のよさ・らしさが文化となるなど、いいほうに目標を持っていけるのではないでしょうか。せっかく幸福というものを持ってきたので、少子化についてもその考え方を持ってきてはどうかと思います。この間もおっしゃっていましたが、人の目が、地域の目が厳しく、いたずらできるような環境ではなくて、秘密基地も昭和だったらつくっていたのに、今ではつくれないのですよ。ある人のうちに誰々の子供が入っていたとそこは地域の人が､知っているけれども､子どもを見守るぐらいの温かさがあったら、少し伸び伸び子育てをしてもらえるようになり、親も、まあまあ、お母さん迷惑かけたと後で言っておくから、遊んでおいでというような、ちょっと伸び伸びとした感じとか、自由さは岩手県にはあるよといった感じだといいＰＲになるのではないかと思います。

○浅沼道成部会長　僕がおもしろいなと思ったのは、まとめ方一つで見え方が変わってくるといったことです。今言った見方の方向を変えて、まとめ方も、例えば、本日示された資料も結局これまでの県の施策を当てはめていっただけですよね。こうなっていくと固いと思われてしまう。そのまとめ方一つにしても何か違うような気がするのです。だから、確かに書き方というのがあり、余りそれを逸脱してもいけないというまさに形があるのだろうけれども、そこら辺に県民の方にわかりやすいというか、訴えかけられるようなまとめ方をしていくように、今の方向は縦割り過ぎるから横をつなげるという、その辺ちょっと工夫してはどうかなと感じました。

どうぞ。

○恒川かおり委員　１回目参加できなくて失礼しました。私はＮＰＯで子供と社会をつなぐという活動をしており、岩手県内の学校現場で支援を行っています。ＮＰＯとしては14年で、ちょっとだけ今お話ししたいことに関連するので、少しだけ説明しますと、時代が目まぐるしく変化している中で、多様な生き方とか価値観というものがすごくたくさんあるのだけれども、子供たちはすごく閉塞感を感じていて、なかなか将来像を描くことが難しいことに不安を感じている子供がすごく多くなっています。ある高校生から、当時、もう十数年前ですけれども、総理大臣もころころかわって、当時は就職難でそういう時代に自分の将来を描くことについての問いかけがありました。時代は変化しているのだけれども、地域のために頑張っている人もいるし、挑戦している人もたくさんいる中で、そういった人たちのところへ子供たちを直接連れていって出会ってもらおうということで、最

大１回で 14 人ぐらいの多様な価値観を持っている人と会わせる取組をしております。これまでに大体２万人ぐらいの子供たちと一緒に 3,000 人くらいの大人が参加するようになってきました。

そこの中でいろいろ感じたことがあったので、そこの中のお話が中心になってしまうのかもしれないのですが、今回示された資料の中に学力低下に関するデータが出ていましたが、少し前の文科省の中学校２年生を対象とした調査によると、もちろん学力が低いというのはデータあるのですが、それと同時に少し心配だなと思うものに、中学生の自己肯定感が全国よりも低いというデータがあります。実際に私たちが学校現場に行くと先生方も自分に自信がないとか、自分のことなのに肯定的に捉えられないというお話もうかがっております。このことは、私は一番の課題なのではないかなと思っていまして、自分のことがすごく大事だと思えないと頑張ろうという気持ちも芽生えないと思うし、地域とか、あるいは未来とかを大事にしようという気持ちの芽生え、あるいは、自分でなくても友達だったり、家族だったり、先生だったり、仲間だったり、いろんなことを大事に思えないのではないかなと考えます。自分自身をすごく大事に、あるいは未来とか、相手とか、地域とか､そういうことを大事に思える子供を育むことこそが私たちの使命と確信して 14 年間取組をしてきています。

今皆さんからの意見を聞いていまして、そのとおりだなと思っており、横断的にやることは難しいシステムがあるという話も出ていたのですけれども、実際にいろんな学校現場に行ってみたりして感じたことは、その立場でないと大変さは理解できないということです。先ほど、お母さん方は大変といったお話もでておりましたが、先生方もそうなのですよね。では、先生だけ大変かというと、そんなことは決してなくて、もちろん行政の人もすごく大変な苦労をされていたり、フリーランスで働いている人の御苦労だったり、みんな民間の方もそうですけれども、経営している人は何をやっていったらいいのかとか、みんなそれぞれ必死になって生きているのですけれども、その立場の人でないと、その立場の大変さは全然わからなくて、想像することはできても、やっぱり触れることはまずないのです。だから、そこはなかなか理解されないままにそれぞれの感覚のまま、ちょっと極端な話をしてしまうと、先生は何か問題があると親とか地域のせいにしてしまう、親とか地域は、先生のせいにしてしまうような責任のなすり合いみたいなこともあるのではないかなというふうに感じることがあります。今回は子供の学びとか育ちというのは、先生とか、親とか地域が、五十嵐さんおっしゃったようにみんなで協力して子育てできればいいのですけれども、なかなかそれぞれの事情があって、それぞれのことを知る機会もないゆえに、何か理解することが難しいし、区切られているというか、それぞれが分断されている、そんな時代になってきているのではないかなということをすごく時代の変化とともに感じています。

もう一つは､私たちは幾つかのプログラムをやっていて､テーマについて子供と大学生、大人がじっくり話すということをやっておりますが、一番危機的だなと思うのはコミュニケーション能力というか、自分の言葉で話しているようなすごく一生懸命話すような子供も、よく考えてみるとマスコミの、テレビの誰かの言葉だったり、何か有名な言葉、例えば、〇〇ファーストなどが流行ったあたりは、子供たちは〇〇ファーストといった言葉をたくさん話していました。自分の言葉のようなのだけれども、本当に自分の頭で考えた自

分の言葉ではないなというようなことをすごく感じることがあります。

自分の気持ちをきちっと伝えるためには考えなければならないし、考えるというのはすごく大事なことなので、もちろん学校の先生もいろんなシステムの中で一生懸命工夫されている点がたくさんあるのですけれども、私の取り組んできた感覚ではもっともっと大事なのではないかなと思います。それが学校だけでは分断されてしまっているので、できるだけ世代が違ったり、立場が違ったりする中での交流という、その中でそれぞれの立場を思いやるようなことも芽生えたり、伊藤さんがおっしゃったような一部だけに負担がいかないような知恵が出てきたりとか、ヒントにつながるのではないかということを取組の中で非常に深く感じています。

また、先生方も本当に熱心にいろいろ頑張られていらっしゃるのですけれども、先生方も何かやるとたたかれてしまうというか、窮屈なのではないかなと思っています。教育委員会や文科省から評価されてしまうという意識が少し働くのかなと感じることがあって、やり方とか言葉を間違うとたたかれてしまうみたいな意識がどこかで働くのではないかなと感じています。

そういう中で、先生方の応援というか、全くしがらみのない仕掛けみたいなものがすごく大事なのではないかなと思います。先生だけではなくて、親もですけれども、そういった仕掛けが非常に重要なのではないかなというように思っております。

先程鎌田さんのほうからも御紹介のありましたヤングフェスティバルといった発信の場につながって、ジャンルを問わずいろいろですが、私たちの生涯学習の場にも色々なボランティアの方々が参加してくれています。岩手県は広い県ですけれども、私たちは県北から沿岸まで、いろんなところに行くのですが、同じ県の沿岸被災地でもすごく支援に偏りがあるのではないかなということも感じています。学校現場の話ですが、ちょっと具体的に言うのは控えますけれども、例えば、一切外部の団体が支援に入っていないような地域もあり、すごく偏りがあるなというふうに感じています。そのほかにもどこが担うべきなのかと感じたりはするのですけれども、10 年、20 年後の地域を支える、未来を支えるのは子供たちだと思うので、子供たちにそういう意識を育む、醸成するというのは何より大事なのかなというふうに感じています。最近でいえば、釜石で開催される 2019 年のラグビーワールドカップの話なのですけれども、釜石のある子供がラグビーの会場として世界で選ばれた、鵜住居が選ばれたと、それは非常に誇らしいみたいなことを言っていたのです。小学校５年生ぐらいの子なのですけれども。地域に誇りを持つとか、愛着を持つというのはいろんなきっかけがあって、陸前高田は、私たちは、入っていないのですけれども、奇跡の一本松といった地域のシンボルなど、地域に愛着を持つきっかけはいろんな方法があって、その方法は別に１つではなく、幾つでもあると思いますので、その地域とか、岩手県に誇りを持って、そこの中で自分のことを大事に生きる、そういう風土があればきっと 10 年後、20 年後も、子供の数が減っていたとしても、その減った中での豊かな県ができるのではないかなというふうに感じており、余り悲観的にならなくても大丈夫なのではないかなということをすごく、子供たちの中に未来がすごくあるなという気は子供たちと接していて感じています。

ちょっとまとまらなくなって済みません。

○浅沼道成部会長　子供、教育というところで普段感じられていることをお話しいただきましたけれども、私が今お聞きしている中で、岩手県内の地域性、今の話にも出てきましたね。地域は、いろいろ違いますよね、僕もいろいろ回って見てきましたが、その地域性を格差と考えるのか、それは個性と考えるのか、それが生きるような取組というのがあってもいいのかなとも思います。沿岸と内陸とではお金や給料などいろいろ差があるのですが、それはそれで現実なのだけれども、それをならすということを目指すのか、それは一つの個性だからというふうにしていくのかといった考え方にしていくのか。差が生じていると、格差社会をどうするのだという議論になる気もしますが、多分教育でも今のように地域によってもそのとおり違って、言い方は変ですけれども、多分差が出てくると。その辺がうまく回っていくような仕組みづくりといいますか、岩手県の場合。広いですからね、これはどうしても見捨ててはいけない部分ですよね、一律の画一的なものを目指してはいけないと思うので。一方で、計画というのは画一的なもので、みんな同じようになっていこうというものでもありますので、そのバランスをどうとっていくかが難しいように思います。

○鎌田英樹委員　文化・スポーツの分野でいわて国体という、２回目の開催に向けての県の政策があって、例えば、スーパーキッズというのをお考えになったのでしょうけれども、それというのは非常にいい成果で、今現在私たちなんか、スポーツは地域振興になるし、私たちのふるさとに対する思いというのを高揚させるといっているのは、そういう施策があったからだと思います。やっぱりいいことなのですよ、差別教育とか昔言っていたようですけれども、その中での突出した能力を伸ばせるようなこういう政策をしてもらって各分野で日本でも戦える、世界でも戦えるような子供たちも出てきているので、だからそういう部分を人づくりとか、具体的なその方法論はわかりませんが、これからいろいろと考えていただくにしてもいろんな御意見をいただきながら、ここの部会だけではないのでしょうけれども、そういうのがあったらば、うちらここで生活していても楽しみだなと思いますよね。何か１つ、２つでもいいので、そういうところでやってもらうと、おっ、岩手県っていいじゃないと思うのですけれども、総花的に何も今のうちからそんなこと言う必要はないのではないでしょうか。よく行政評価やＫＰＩなどよくありますよね。前年度に比べてこの項目に関しては何％だとか、よくできましたとか、まずできましたとか、ああいうところを目指して、皆さんも大変だろうと思うのですけれども、そういう世の中になっているのですが、経済効率だけとか、そういう評価主義だけでやられると多分皆さんも大変なのだろうなと。失敗した項目があって、よくできなかったやつが３分の１あったけれども、いいじゃないですかと。みんなで岩手県で何かこういう特色がある県にしたいのだからという、私たちもそういうのを追うように見られるような、あるいは、心を持たなければならないのではないかなと思います。ただ一方的に行政当局にばかり言うわけではなくて、言ってみれば教育だって昔から指導要領とかあったのでしょうけれども、それなりに差はついているわけですし、だから昔は家庭が悪いとか、学校が悪いと言わないで、自分が悪いと言われたので、ちょっと甘いのですけれども、評価ばかりにこだわらないほうが好きなのですけれどもね。

○浅沼道成部会長　今鎌田委員さんがおっしゃったようなことは、まさに豊かさそのものだと思います。業績主義できちっ、きちっと評価していく社会を求めていくこともわかるのだけれども、それは合理的に動く社会であって、実はのんびりとスローに生きるにはそんな尺度は要らないのだと思うのです。遊び心というか、「まぁ、いいんじゃないですか」という世界ですよね。それは岩手の豊かさかもしれないと、そう思います。

○鎌田英樹委員　大学の進学率が出てきますと、岩手県は低いとか、だから上げなければいけないとはよく言うのですけれども、一方で私たちは中学卒業して職人の世界に入って、例えば、貴乃花親方の息子さんが靴職人になったなんて聞くと、偉い人だね、立派だねと口では言う割には、大学進学率とかを気にしている側面もあります。それは大学に行って違う教育をすると可能性は広がるものもあるのでしょうけれども、一方では前にも申し上げたかもしれないですけれども、職業教育というか、専門学校に通っている子供たちというのは 15 の春から明確な職業意識と人生観を持ってその学科、学校を選んで入学した人たちで、先生方には一生懸命教えてあげて、いいんじゃないか、自分の方向性間違ってなかったからこういう職業を選ぼうとか、いや、もうちょっとこれを深めたいから、さらに大学に行ったって、もちろんあるのでしょうけれども、でもそれはそれでありだと思うので、高校進学率ばかり横並びで、高くないから岩手県がそういう意味での学業のレベルが低い、教育熱心な県ではないとかというのとは、また若干違っているというのはいつも思うのです。職業高校を卒業した子供たちの離職率が低かったら、いい教育しているねということになって、そちらをアピールできたほうがよっぽどいいなと思います。

○五十嵐のぶ代委員　勉強できるだけがいいというわけではないですからね。

○鎌田英樹委員　と言っているときれい事みたいに聞こえますけども、でも、そのぐらいの思いもどこかに持っていかないといけないかなと思います。

○恒川かおり委員　寛容さと多様性のことだと思うのですけれども、やっぱり多様さというのがいろんなところで失われているからこそ必要だという話だと思うのです。まさに多様性に関係して、不登校とかが結構増加している中で、学校に行かなくてはいけないということに苦しんでいる子供たちもたくさんいるわけです。実際私たちの 3,000 人のボランティアの中には高校を 3 日間ぐらいで中退してしまったという人がいますけれども、今は映像クリエーターとしてすごく大活躍されている人とかいっぱいいるのです。挫折した、失敗したのだけれども、今はすごく活躍している。だから、学歴としては非常に低いのだけれども、専門で手に職をつけてシステムエンジニアやアプリの開発などをしながら、そういう世界で学歴関係ないところで生きられる社会でもあるので、そういうのは子供たちを実際に連れていって見せることをしています。その中で、一番すごく思うのは先生やお母さんたちは、そういう時代の変化の中で、自分の価値観の中では知らないわけなのです。そもそも様々な生き方があるけれども、自分が頑張って高校卒業したり、あるいは大学を卒業して、ある程度安定した仕事、正規の職業につかないともう落伍者みたいな心境がす

ごくあるのですけれども、実際に一つの仕事を持って頑張って生きている人たちもいるのですよね。岩手県の中にもいます。私の知らない職業、こんなのいっぱいあるのだと驚きます。だから、そこが分断されないで共有されるような、先程もおっしゃっていましたけれども、ものすごく頑張っている人がみんなに知られるような、例えば、マスコミで発信していただくとか、あるいは何らかの形で共有できるような仕組みがあるといいなと思います。

○浅沼道成部会長　どうぞ。

○鎌田英樹委員　経済同友会の立場でございますと、新入社員の募集をかけて、今割と求人倍率が高いとかといって、なおかつ、一方では県外流出の問題があるのですけれども、経営者の方々がすごく悩んでいらっしゃるのは、子供さんの入社に対する意欲があったにしても、会社名を聞いて、それやめなさいと言うのは親なのだそうです。よく内定辞退と聞くので、どういう理由ですかというと親から反対されましたとか、聞いたことないからやめなさいとか、それが企業のもちろん努力もあるのでしょうけれども、やっぱり親御さんたちの意識も、幸福度にひっかかるかどうかわかりませんけれども、少なくとも入社のときのそういう最近子供さんの数が少ないせいか、親御さんが割と干渉する場合が多くなっているようにも感じます。実際そういうところがあるようでございます。

　ということで、その辺の意識をどうするかと考えれば、今回の幸福の指標で言うと若い人たちが意外と私たちの職業観と違ってやりがいを大切にするというような方が増えているらしいのですよ、若い人たちに。統計をとるからそういうふうなところに丸をつけるのか、あるいは答えるのかわからないですけれども、でも子供たちは子供たちで自分の人生を考えていると、そういうことを大事にしてあげたいなというふうに思います。

○浅沼道成部会長　私は岩大の就職委員長ですが、岩大生というのは全くそういうのに疎いのです。本当に県内の企業さんのことは知らないし、名前で判断するのです。親もそうだし、本人もそうです。こんなすばらしい、海外に行ってすごく業績上げている会社なのに知らないという、それは完全に企業を勉強していないだけの話で、企業を研究していないだけなのです。

○恒川かおり委員　目に見える賃金は確実に低いので魅力が伝わりづらいのかなとも思います。

○五十嵐のぶ代委員　今、過干渉ということが挙げられましたが、まさにそのとおりなのです。私は子供が３人いて、ずっと育てていて感じるのが、まずスポ少の応援とかがそうです。旅行の準備、遠征の準備もまず、そう。今度それが中学に上がると、中学の部活動に関しても過干渉で、必ずついていく。危険の問題もあるのですが、見守り隊として保護者がいて、そのために子供同士の競争ではなくて親の競争になったりしている部分も教育長は、現場サイドでわかっていらっしゃるとは思うのですけれども、本当にそれが子供にとって大変な問題だなということを感じていて、ＰＴＡのほうでも親育、親育て、家庭教

育の部分で親自身が自立していかなければいけない。そして、子供たちにもそれを進めていかなければいけないというので、非常にその部分でも学校の先生方の負担が増えている、保護者の過干渉が増えているというところが現状だと思います。

知り合いの保育園の経営者さんが保育士足りない、足りないと言っている中で、せっかく入社してくれた若者が親の過干渉でやめてしまった方もいるのです。夜７時が帰る、退社する時間だと言っているのだけれども、８時になっても９時になっても帰ってこないので、保育園に親が電話して、うちの息子まだ働いているのでしょうか、早く帰してくださいということもしゃべって、もう退社していて子供は自由な時間。子供というか、もう成人していますが、自由な時間でフリーで遊んでいたりすることまでも、親が入り込んでいってやめさせたりというのが実際にあるそうです、鎌田委員のおっしゃるとおり。だから、子供たちを教育するということも当然必要なのだけれども、今の中学校では学校の先生方が保護者に対しての進路指導までしなければいけないということで、資料づくりで大変な時間を要しているという話があります。なので、今の立場がＰＴＡでもその辺しっかり保護者として見つめ直していかなければいけないなというふうに、常に話をさせていただいています。

○浅沼道成部会長　熊谷委員さんどうですか。

○熊谷雅英委員　いい部会だなと思いながら、皆さんのお話を聞き惚れて話をしないでおりましたが、先程鎌田委員さんからスーパーキッズのお話の事業について、差別教育ではなくて、差別と思う人もあるかもしれないけれども、能力を伸ばす事業だというお話を聞いて、私もそう思っています。

それで、委員さんからお話あった自己肯定感が低いと、これは世界の中でも日本が低くて、その中でも調査をすれば岩手が低いのです。謙虚といえば謙虚ということなのです。自分を余り立派だとは評価しない。ただ、やっぱり今後 10 年の教育を考えたときに、私はこの前、誇りを持つとか、自信を持たせたいというお話をしましたが、何とか県民みんなで教育機関、県行政、マスコミを含めてもっと誇りを持たせる教育を行うことで、誇りを持つ県民にならないかなと思っています。

日本人が成長するに当たっては、やっぱり課題を克服して伸びてきたというふうには思います。学校もこれまで不得意教科を何とかしようという発想で来たのですが、そうではなくいいところをもっと伸ばしていくことで、それが自信につながると考えます。悪いことばかり言っていれば、やっぱり伸びないような気がします。

それで、この資料の中に、これはあくまでも資料だと私は思っているのですが、先程説明を受けた弱みとか強みというところで、例えば、学力テストの学力が岩手は低いのではないかというふうな話もあるわけです。しかし、これは取り上げ方の問題で、実は昭和三十何年に学力テストあったとき、岩手県は最下位でした。今やっている学力テストは小学校の算数、国語も全国平均を上回っているのです。でも、新聞には、数学は全国で下位という見出しで報道されるわけです。実は、小学校の平均は全国の平均を超えているわけです。ところが、「中学校の数学が下位」というふうに報道されると、「岩手の学力が低い」となるわけです。全国で最下位だったころから教育振興運動があって、学力向上に取り組

んで、子供部屋を設けようとか、読書させようという運動があって、今やっと全国平均になっても、いまだに岩手の学力が低いと思い込むような報道されるとすれば、そっちの方が私は問題ではないかなと思います。今は全国並みなのですから。

不登校もそうです。不登校は 900 人台から 1,000 人になりました。資料では弱みに書いてあります。実は、全国で一番不登校率が低いのは岩手県なのです。あまり知らないのですが、みんな不登校が多いと認識している。多分つい四、五年前のデータでは全国で最も少なかったはずです。学力は比較するのだけれども、不登校は全国と比較しない。確かに 1,000 人いるので、これはやっぱり不登校の親御さんにとってみれば、全国より低いといったって、うちの子が不登校だと全国との比較は関係ないかもしれません。しかし、どこかで不登校の率は全国で一番いいのだと、もっと岩手を褒めるというか、子供たちを褒めることが私は大事だと思っています。そのことがだんだん誇りになって、そしてちょっとぐらいできない部分があっても、「俺はこれが自信あるのだ」ということで、先程の職業選択とか、いろんなことにつながっていくのではないかなと思います。もっと県民みんなで岩手県を褒めたり、岩手県の子供を褒めたりする教育、思い切ってこの 10 年やってみようではないかと、私は今のお話を聞きながら思っているところです。

滝沢市は、頑張った子供たちが市長に報告する取組をしていて、そのことが新聞に年に何回か載ります。教育長に報告来ても新聞には載らないのですが、市長に報告というとマスコミはまず来るので、年４回ぐらいやっているのです。すると、市民の方たちから、滝沢市は随分スポーツ・文化頑張っているね、と言われますが、実はほかと同じくらいなのです。しかし、そうやって褒める機会を設けると子供たちも何か自信を持って進学とかいろんなことを考えているのです。やっぱり褒めることが大事なのだなというふうに常々思っているところです。

○鎌田英樹委員　昔から理数系は上で、それ以外は、いわゆる社会だとか、国語だとかちょっと下に見るような風潮。数学できると頭いい子だみたいな、それもあるでしょうけれども、今の世の中というか、最近の日本の状況を含めて理数系を結構もてはやしていて、いわゆる文系出身者がなかなか、別に日が当たらなくてもいいのですけれども、全然捉え方が違う、今は。何でも、先程の効率主義にもつながっているのでしょうけれども、大学での研究成果で幾らのそういう研究費を外部からとってきましたというと、大体理系の分野ですね、機械、新薬、何か新しいのをつくりました、と。ところが、文系の文学部を出て何か気のきいた文章を書いたからといったって、それが世間的に大学の評価として何かがつくわけではない。例えば、法学部だって弁護士、裁判官、判事になれば、それはと言うのでしょうけれども、ただ卒業しただけで、特にその先が突出したところがあるわけではなくて、データは関係ないのでしょうけれども、ちょっと文系を含めて世の中全体がそういう効率というか、それだけで理系、理系と、これからの子供たち、岩手の中でといったら、なかなか地元に定着しにくいじゃないですか。理系というと、岩手県で言うと岩手大学はもちろん工学部がございますし、県立大学があるのですけれども。

○浅沼道成部会長　基本的に今国が文系をもう潰そうとしているので、大学から文系はなくなる可能性高いです、はっきり言って。教育学部もなくなるでしょうね。そのうちに人

社がなくなってと、要するに国がそういう方針で、国立系から文系をなくするという動きですから、逆に言うと大学で卒業して残っているのは文系なのですよ。岩手県内には理系の就職先があまりなく、最近ちょっとずつは増えていますが、結局は外へ行くのですよね。理系は外なのです。岩手に残すために企業を誘致して理系を出た人たちの職場をもっともっと確保しないといけない。岩大も理系を卒業すると外に行ってしまう学生が多いですね岩手県としては文系を大事にして、技術者だけではなく、そういった人材を大切にするといったことを掲げてもいいような気がするのです。

○恒川かおり委員　この前、芥川賞を岩手県在住者が初めて受賞しましたが、ああいうことはすごくインパクトがあって影響力が大きいだろうなとは思います。活躍した方もそうですが、活躍した人だけではなくて、全てのそういう人たちの思いをちゃんと伝えるとか、そういうものを大事にしていければというふうに思います。

○浅沼道成部会長　先程の鎌田委員からお話しのありましたスーパーキッズの件も含めて、僕はずっと初期から、最初から関わっておりますが、正直言って危ないです。というのは、これ先程の政策の話の中で成功例という話がありましたが、岩手県は結構いい事業いっぱいあるのだけれども、予算がなくなったら終わるのですよ。その後、それがうまく育っていけばいいけれども、もったいないというのがたくさんあるような気がするのです。ただ、そこにどう重点的に、もしかしたら 10 年、20 年、100 年後に花が咲くかもしれないけれども、やっておくべき事業、金かけておくべき事業とか、継続事業、スーパーキッズはもうお金もなくて、今瀕死の状態なのです。でも、結果は出ていますけれども、そういったところでもっと政策の評価の仕方といいますか、本当にその成功例を重ねるという話ですが、それがうまくいっていないような気がします。非常にいっぱい成功例があって、いい事業がたくさん県でやってきたものが何かぷつっと切れる。一番典型的になっているのは国ですよね、国が措置した事業をやるしかないという立場でやっていて、いい事業なのだけれども、国のお金が切れたのでやめてしまったと、もったいないというのを僕はかなり経験してきたので、難しいですけれどもね、お金がなかなか満額ではないのですけれども、そういう意味では岩手はそんなに捨てたものではないというのは、すごくうまく皆さんは取り組んでいらっしゃると思うのです。それを前面に出していくというのが皆さんの共通したところではないでしょうか。それは誇りになりますものね。そういったところを表に出るような政策を発揮していただければと、それをすごく感じました。

ほかに何かありませんか、自分の分野でそろそろ、もう一回自分の得意なところで何か。

私から言うとスポーツですね、今ヒントとして、こんなにトップ選手が出ている時代はないのではないかと思うのです。確かにオリンピック選手は昔も出ていたし、いらっしゃるけれども、今、まとめて大谷や雄星、スノーボードのオリンピック選手といったように、こんなにいっぱい出てきたというのは一体何なのだと。それも決して都会から出ているわけではないですからね。銀次は普代出身で、本当にいろんなエリアから実はそういう才能を持った子が表に出てきたのは一体何なのかというのに一番興味があります。

○五十嵐のぶ代委員　スーパーキッズではないのですか。

○浅沼道成部会長　スーパーキッズで出たのはジャンプです、小林君。

○伊藤昌子委員　ふたばさんは。

○浅沼道成部会長　ふたばさんは違います。でも、ああいう人がぽっと出てきたのにはそれなりの理由があるわけです。そこちょっとおもしろい、岩手なりの何か理由がありそうな感じがするのです。あれだけ出てきて、ましてやそれ以外の分野でも優秀な、いろんな世界に通用するような人材が岩手から出ているわけですから、そこをもう少し分析しながら、そういった個性が出てくるようなもの、特に政策の焦点当ててもいいのかなと。おもしろいですよね。

○鎌田英樹委員　いいですよね、すごくいいと思います。

○浅沼道成部会長　まさに誇りです。昔は岩手の評価は低かったのですが、最近逆に岩手ってすごいねという声を多く聞くようになってきました。岩手って北のほうだよねという人もいっぱいいるわけだけれども、逆に僕らは南のほうを知らないのと同じで、褒める言葉のほうが増えてきたという実感あるのです。やっぱり何かあるのですよ、岩手のよさというというのは最近、世間には発信はされていると思うし、感じる人たちが出ているので。その感じたことは一体何なのかなというところの分析でも、先程の外国人の方の意見も参考になるでしょうし。今度宣伝するわけではないのですけれども、デビスカップというテニスの国別対抗戦というのがあって、２月に盛岡のタカヤアリーナでやるのですが、イタリアチームと日本です。それをやるのですが、この間イタリアの代表の方が視察に来たときに、英語は全く通じなくて怖いと言われました。イタリア語は話さないで、英語で話したのだけれども、どこに行っても通じなかったと。しまいにはカードで店に入ったら使えなくて、俺は昨日食事しなかったと怒られたのですけれども、そういう意味で何かちょっと国際的になれというわけではないですが、結構外の人を呼ぼうとしている割にはちょっと何かまだまだレベルが低いなというのは感じました。

○鎌田英樹委員　英語で声かけられて、例えば、私たちが英語できなくてもはにかんだ笑顔だけやったりしますから、友愛の心で。私は、県立大学の鈴木学長さんがＩＬＣを推進する上で、御講演を伺ったときに、ついつい英語教育大事です、地元に通訳何人必要ですと、まずそっちのほうから考えてしまって、当然構えますよね。インターナショナルスクールが必要だ、先生はどうするんだといった感じで。しかし、そうではなくて、まず先生が言うのですよ。外国人は、研究したいために来るのだから、生活したかったら、必死になって覚えますと、まず日常会話というか、生活のために。だから、そんなに心配しなくても、黙っていれば、外国から来た人たちがそのうち東北弁しゃべりますからぐらいのことをおっしゃったのです。多分それらは我々の心のハードルを下げるためにわざとおっしゃっているのでしょうけれども、何かそう言われると少し英語教育も含めて安心して外国人を受け入れますといった感じで、そういうような何か心のありようというのも必要だろ

うなと思うのです。

○浅沼道成部会長　それはまず経験だと思います。だから、話さなければだめではなくて、話せなくてもいいから、会う、何かのコミュニケーションをとろうとすることがスタートで、そうすると安心して、話さなくても、普通に日本語で普通に言い返しますから。そうすると相手も「おっ」と思ってくれるし、それも自信ですよね。結構みんな自信ないからついつい引いてしまう。

○鎌田英樹委員　多分この中ではそういう方向性も一緒ですよね、ここに書いていましたけれども、最近の若い子たちが外国留学しないとかというのもありますけれども、多分そういう機会を多くつくってあげて、行くチャンスというか、私なんかが子供のときには留学なんていうのは限られた人数だけで、しかも成績のいい人しか大体選ばれませんから。最初からうちらはもう無縁な世界だと思っている人がいっぱいいたと思うのです。でも、こういう時代になってきて、先生がおっしゃったように子供たちにまず経験させることであれば、多くの人たちを２泊３日でも外国へ行くようなチャンスを県としてとか、市としていっぱいつくってあげたらいい、あるいは家庭でももし余裕があるのであれば、ちょっと行かせてあげるというのがあれば、その積み重ねがあると子供たちの自信につながるのではないかと思います。

○浅沼道成部会長　はい。

○伊藤昌子委員　活動を通して感じるのですけれども、被災地の人、転勤で来ている人が多いのですけれども、それで初めて陸前高田に来て広場があってよかったと。東京にもしかしたら転勤になるかもしれなかったのですけれども、東京で子育てするより高田で子育てしてよかったというのは、やっぱりコミュニティ、コミュニケーションとれるということと話せることが大きいのだと思います。東京で孤立して子育てするのはすごく大変だったと思うので、やっぱり岩手県は、よく被災地の絆はあるけれども、田舎は面倒くさいつながりというのがあるじゃないですか。それは逆によくて、やっぱりそこが岩手のよさなのではないかということを感じます。

それで、文科省で、子供たちの生きる力をつけさせるということなのですけれども、やはり生きる力とは、コミュニケーションですよね、なのでそれがあれば外国の方もすごく岩手はすばらしいと、人と人とのつながりをはかるというところで来た甲斐があったとか、それがあると思うのです。ここの４ページの英語の授業における英検３級とか例えば取るじゃないですか。でも、会話はできないのですよね。だから、やっぱり人とのつながりで、何かそういうコミュニケーションをとれる機会があればいいなということを感じました。

○浅沼道成部会長　陸前高田は地域力があるんじゃないでしょうか。都会の人達はそういったところに魅力を感じているのかもしれませんし、そういう人たちにそういった安心して来られるようなことをしていけば岩手に移住してくる人も増えるかもしれないと思いました。今のお話からするとすごく狭い話ですけれども、テニスで国体のために強化をした

のです。本当にいい事業をしていただいて、お金をいただき、実は成果が上がっていったのです、テニスは。いざ本番のときに１人ずっと小学校の高学年から育てた子が、「すみません、兵庫に行きます」と言い出して、行ってしまったのです。行ったら、すぐに全国で１番になってしまった。今年のインターハイの三冠王で、岩手県出身者では初めて、団体、個人、ダブルスと優勝してしまったのです。要するにベースをつくったのはこっちなのです。岩手には実はそういう子が多いのです。ということは、岩手は育てるという地道なところはいいけれども、経験の積ませ方が岩手は下手というか、岩手でトップが育つという、それはスポーツだけではなくて、いろんな分野でも同様なのかなと、ちょっと悔しいのだけれども、それを今痛感しています。

○鎌田英樹委員　分野ごとに、テニスならテニスで、岩手県で、あそこに行けば強い選手になるといったら、ほかの県からも来るのです。高校野球は若干意味合いが違うのだろうとは思いますけれども、大阪や神奈川から甲子園に出たいということで岩手に来てもらったらうれしいのですよね。３年間だけでも岩手県民になってもらって、いずれ帰っていくにしても、岩手に住んだことがあるという経験をしてもらえるのはありがたい。そういうスポーツ推進県とか、競技としての強い分野があったらおもしろいですね。

○伊藤昌子委員　あとスキー場もありますしね。

○鎌田英樹委員　ですよね、冬季オリンピックのそういう競技の特に全国クラスの人たちがこっちにまで来ないとアジア大会に行けないとか、オリンピックに出られないなんていうのが岩手県のほうで発信できるくらいだったら大きな夢があっていいですよね。

○浅沼道成部会長　私はＮＰＯの中間支援をやっていますが、やっぱりＮＰＯが生きられるような環境じゃなくてつらいのです。重要なのです。やっぱりいい意味で役割を社会では担ってくれる団体というか、ＮＰＯ関係でしている人たちがいっぱいいらっしゃるのだけれども、その人たちが生きづらいのです、生活しづらいというか。何かそういうところを、要するにこれから少子化していくのは事実なのだから、本当にそういった将来 10 年ビジョン、もっと 50 年後ぐらいを見据えた上での働き方、岩手でも生活の仕方の中にそういったものを今のうちから育てていくというのですか、何かそれが気になりますね。ＮＰＯやっていてつらいということは、言葉悪いのだけれども、僕自身は自分の仕事を持っていて、理事長なんて役をやっているだけなのですが、それでも責任はいっぱい来るのです。しかし、その人たち見ていてすごく一生懸命だし、すごい能力とか考えとかいろいろ持っていますが、なかなか食っていけないのですよね。もったいない。何とか岩手の中で、そういったものが本当にうまく回っていく仕組みというものをちょっと目指していただければなというのはＮＰＯやっていて感じています。まだ岩手県はＮＰＯアレルギーがある県といったらあれですけれども、荒れたのは一部のとんでもないのであり、大変いい仕事をしているＮＰＯさんがたくさんあるので、その見える化したり、それをもっと回せる、社会の中でもっと生きるような仕組みとか、言葉だけで地域協働とか、協働でという、言葉で終わっています。もうちょっと政策の中に取り入れていただきたいなと思っています。

○伊藤昌子委員　そうなのです。まさしくそれで、被災地でも大学生、大学院生から高田で子育て支援の仕事がしたいという申し出を受けましたが、お金も払えないし、住むところが高いということで悔しい思いも実際してきました。

○浅沼道成部会長　働き方を変えていくと、ダブルワーカーとか、いろんなものがあるじゃないですか。そういったものが自然に当たり前になっていく社会でないと、ただ先程言った昔の形だけがすごく正しくて、そこから外れているとここがおかしい、だめだという、ここがもっとフラットになっていったら、それぞれ役割が多分社会の中で担われるような仕組み、学生はどうしても給料の高さだけに走っているし、本当の質、やりたいことってないのです。でも、やりたくて行ったときに、でもそれで食える仕組みを少し地域で育てていかないと、何かどんどん、どんどん細くなっていく。もっと太っていくような、地域がね、それもちょっと気にしていくべきだと思います。

○恒川かおり委員　今人生 100 年時代とか、100 歳まで生きる人もすごくたくさん増えていて、25 年ぐらいの退職した後の生活みたいなところがすごく薄くなっている気がするのです。岩手では退職した後にもやりがいをもって生きていけるようなそういう仕組みがあるとおもしろいのかなと思っています。

○鎌田英樹委員　私も来年前期高齢者を迎えるので、つらつら考えているのですけれども、よく岩手県の政策とか、どこの行政でも同じかもしれませんが、意外と沿岸部は違うかもしれないのですけれども、少子化、少子化とは言うのですけれども、高齢化に対しての項目って、最近特に見えなくなってきたというか、見るケースが少なくなってきているのです。私の思いですよ。前は健康で長生きというような、そういう目的があって今長寿になっているのでしょうし、子供たちに対してのやりがいも与えてやりたいのですけれども、リタイアした人でも健康寿命までの間に 10 年近くありますよね。だったら、せめて 65 から 75 までそういう人たちにやりがいという意味で、教育やスポーツなどで、例えば、現役の先生がなかなかこっちもやれないというのであれば、そういったことは最低限、年金はあるのですから、あとはやる気があればというところで、リタイアした方にそういうのを委ねるような仕組みとか何かをそれぞれ考えられればと思います。

○恒川かおり委員　経験あるわけですからもったいないですよね、それを生かしたいですよね。

○鎌田英樹委員　高齢者に対しての政策というか、思いを項目に入れていただきながら、そうすると皆さん喜ぶと思うのです。私なんかは昔親に、いつもそうなのですけれども、年寄りは迷惑だというふうに思われているようで、長生きするとすごく後ろめたいとよく言われていたのですよ。医療費はかかる、寝たきりになったらなど、でも以前は家庭制度が今とは違って、ちゃんと 3 世代とか何とかやって、だから働き方に関しても女性も安心してというか、子供を預けていけたのでしょうし、送り迎えもしてもらえるといった世界

もあったのでしょうけれども、少しそっちにスポットライトを当てていただいて、あなたたちのことも、これからの現役としてすごく期待していますというようなところなんかは打ち出していただけませんでしょうか。頑張って･老け込むのはまだ早いよと、老け込むのは早いと思います。実際に今の高齢者だって、支えているのはそういうシルバー世代です。シェアがどんどん、どんどん増えているので。

○浅沼道成部会長　逆に親の世代の 30 代、40 代の人たちが実は豊かではないのです。余裕がないのでしょうけれども、それが少し社会を楽しめるというか、地域で何か自分のことを楽しめるようなものがあれば、少しその辺の先程の話も変わってくるかと思います。

○鎌田英樹委員　一方では、男は働き方改革で働き過ぎて、仕事ばかりやって、家事を何とかと言われて、でもそれぞれ家庭があるので男女、育児、家事、全部みたいなことをＫＰＩとかあとで言われると、それはそれで苦しくなると思いますので、少し大らかにできればよいと思います。

○五十嵐のぶ代委員　今シニア世代というお話があったのですけれども、別件で認定こども園の関連の充て職もやっているのです。先程もちらっと言った保育士不足ということがすごくあるのだけれども、今の推奨されている育児と、10 年前の育児というのは全く変わってきているのです。例に挙げれば紫外線を浴びさせないようにするとか、なのでお散歩は何か月まで控えましょうとか、布おむつよりも紙おむつのほうがいいですよとか、あと予防注射の合体している種類も変わってきている。なので、今の子育てで必要なことというのが 10 年前、20 年前と丸っきり変わってはきているのだけれども、では親としてどういうふうに接していくかというのは、やっぱりシニア世代のベテランの人たちのほうが上手で、経験値も高いわけで、なので保育士を一旦リタイアした人と、あるいはまだ結婚していない新しい保育士の人たちを同じところで働いていただくことで協力し合える、支え合ってお仕事できるようなサービスが提供できるということを実践して、人材バンク的なことをやって、県のほうであっせんして配属させているという事例があるそうです。そういった認定こども園に関してはうまく回っているというところもあるので、そういった保育だけにかかわらず、いろんな分野で得意なところを補い合うという形をしていけば若い子も学ぶ部分も多いでしょうし、それこそ働き方改革で時間外労働の縮小にもつながっていくのではないのかなと感じました。

○浅沼道成部会長　もうそろそろ終わりですけれども、スポーツの一番最後のページの強み・弱み、リスク・チャンスについて、私は自分にも関わりがあるので、ちょっと見たのですが、やっぱり先程の話のように強みとか、弱みとか、この辺というのは、県の評価と我々が考えることとは、違うと思うところが結構あるような気がします。例えば、スポーツ振興の中の強みの８番目は、できているところを書いていると思うのですが、これが全部うまくいっているとは思えないものもあります。例えば、スポーツ推進員の配置 710 人とたくさんいるようにも見えますが、この人たちの中で全然機能していない人たくさんいることが挙げられます。それからリスクのほうで言うと、③の総合型地域スポーツクラブ

の収入減少。ｔｏｔｏ終わったから、これは当たり前で、こんなのは減少ではなくて、育てるということをしてこなかったということが問題なのです。これだけ見るとｔｏｔｏがなくなったからお金がなくなって困っているよという感じだけに見えますが、そうではなくて、これは本当は強みに入るぐらいのものだと思っています。というのも、総合型スポーツクラブというのは月１回ですけれども、要介護１とか、そういう人たちの運動する場づくりとして活用されています。いいメニューを持っているので、そういったところは、本当は強みなのですけれども、県の作った資料ではリスクになっているところも見受けられます。このＳＷＯＴ分析の表現は、皆さんでもう少しチェックしてもいいのかなと思います。

○熊谷雅英委員　今後 10 年の取り組むべき方向性ということで、先程誇りを持たせるという話をしましたけれども、伊藤委員さんもいますが、東日本大震災からの復興教育というのは、岩手にとって大事なものだと思っています。やっぱり風化したとか、何とか言われていますが、まだ住まいもない人がいっぱいいるわけで、復興教育を進めていくことが岩手ではものすごく大事にしていってほしいと私は思っています。

復興教育は何かというと、この前ちょっとお話ししたのですが、私は命の教育だというふうに思っていまして、生きたくても生きられなかった 6,000 人なりの人々がいる。被災地から岩手の子供たちには、一度は被災地に行き学んでもらいたい。自他の命を大切にするということは、思いやりの心を持つことです。相手に対する思いやりの気持ちを忘れないで自分なりに精いっぱい生きることの大切さ、そういうことを大事にすることを、特に岩手の子供たちにはこの 10 年間言い続けていかなければならないのかなと私は思っております。

○浅沼道成部会長　私は、ＮＰＯで復興支援に取り組んでいろいろやってきて、徐々に役割が終わってきたものもありますが、逆に今からが本当は復興に関する重要な仕事というか、役割があると考えています。県としても陸前高田にメモリアル施設を整備していますが、これについては、申し訳ないけれども、規模が小さ過ぎだと思います。もっとしっかりした拠点をつくって復興教育をするのが県挙げての大切なミッションだと思うのですが、それぞれの市町村に任せているような気がしています。岩手大学としては今全員に、１年に入ったら必ず被災地に行って復興教育を受けるというのを必修にしているので、毎年、全員行っています。それも大変なのですけれども、そこで得られるものもたくさんあると思うので、そういったのをまとめてということではなく、それぞれやればいいのですが、もうちょっと県の姿勢としてこの 10 年、しっかりした一つの柱にしていただきたいと思います。予定では、復興計画が終わる、ある時期は重なると言っていましたけれども、復興についてもしっかりと、今回入れ込んだほうがいいのだと思うのです。これもちょっと残念ですけれども、陸前高田のところにつくるのは県のお金でしたか、県が出すのだけれども、中越のほうが立派だなと思って。

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　国と県で、はい。

○浅沼道成部会長　ですよね。だから、もうちょっと、人がいっぱい来てほしいとは言わないけれども、それをうまく活用して教育が回っていくような仕組み、例えば、岩手大学もいつも困っているのは、今言った復興教育で被災地のどこに行っていいかがわからない点が挙げられます。それがしっかりしてくると復興教育としてうまく回っていくのではないでしょうか。

○伊藤昌子委員　ぜひお願いします。午前中もスタッフミーティングをしてまいりまして、話題に上がったのですけれども、今仮設住宅は撤去の時期に入っていまして、６月いっぱいまでと言われているのです。大分再建したりとか、公営住宅に入ってきましたが、１軒だけ残っているところがあって、かさ上げ位置が整備されていないから残っていて延長をかけますけれども、いずれ撤去の時期なのです。震災から６年、７年目なので、それを伝える人たちも年とってきていますが、人づくりとか、命の大切さといったことがすごく大事なところだと思うので、復興教育について、ぜひお願いしたいと思います。

○浅沼道成部会長　教育だけではなく、生涯学習分野にもまたがってくるものだと思います。岩手にとって重要な、ある意味ではそれを活用できるものに育っていくと思うのでね。

○伊藤昌子委員　今、陸前高田市に来てくださっている先生方の中にも震災を経験していない先生もいて、今の１年生も小さかったから体験してないといったこともあります。そこで、体験してない人たちにどう伝えるか課題になっています。今は第一中学校がやっと時間的にも、気持ち的にも震災教育を受け入れられる状態になってきたので、ＳＡＶＥ　ＴＡＫＡＴＡという人たちが、第一中学校で子供たちに防災を教えてくださったりするのです。だから、おっしゃったとおり、支援が入ってないところは入ってないし、入っているところは手厚く入っている。学校では副読本をつくったので、必ず時間は割いてはいるのですが、復興教育や防災教育のレベル感や各学校での取組などを被災地でどのようにやっていくのかも考えていかなければならないと思います。

○鎌田英樹委員　どの学年が最適なのかわからないですけれども、うちら被災県に生まれ育ってというか、そうでなくても、今岩手においでになっている方も含めて少なくとも一回は自分たちの住んでいるところでああいうふうな大災害が発生したこと、それは必ず見るということは必要なのでしょうから、家族単位という、そういういわゆる心のボランティアに委ねるのではなくて、学校現場で強制的なら強制的にとにかく行く、何年生のときに一回は沿岸部に行って、まず見て自分なりにそれを考える。

○伊藤昌子委員　総合学習にするとかね。

○鎌田英樹委員　そうですね。指導要領がどうなっているのかはわからないのですけれども、それだけは岩手としてはやりましょうよぐらいの話でやったら、被災後に生まれた方々とか、そこだけではなくて内陸も含めて、人ごとではなくて、考えてもらえるのだろうし、自分の進路、将来を考える一つの手助けというか、道しるべにもなるのかなと思います。

岩大の皆さんが１年生から必ず被災地に行くといった教育はすごく立派だと思うのです。行ってみなければわからないということもあると思います。

○伊藤昌子委員　今道路も日々変化していて、地元民でも「えっ」となるようなこともあります。突然、袋小路になったり、曲がれなかったりなど、そういった現実も知ってほしい。

○五十嵐のぶ代委員　小、中では震災直後から校長会とＰＴＡとで協働して横軸連携というシステムづくりがスタートしました。形だけは今でも残っているので、姉妹指定校というのが自分の学校はどこだということはお互いにわかっています。いまだにお付き合いしている小中学校とかもありますし、形だけあるというのも、もうそのまま関わりがなくなってしまっているところもありますが、システム自体は今でも残っているので、連携を強制させたら、予算の問題で、非常に苦しいかなとは思うのですけれども、活用できるかなと思って聞いていました。

○熊谷雅英委員　ありがとうございます。横軸連携という言葉と姉妹指定校という言葉は私がつくったのです。今も使っていただいてありがとうございます。私が校長会のとき、震災後２週間して横軸連携というものを校長会同士でやったのです。そうしたら、実はあの学校には知っている校長がいるとか、職員がいるということで、連携関係が生まれそうになった。しかし、連携できる学校はいいが、連携のできない学校が出てきます。そこで、被災校 27 校中学校があったのですが、個人的なつながりだけで結ぶと転勤などがあると、長く続かないので、内陸の学校を一つの学校に対して被災地の学校に３つとかで組んで、同じ学校同士で長く続けましょうということで、姉妹校連携というのをつくったのです。それが今も続いているのです。

○五十嵐のぶ代委員　県Ｐ連のほうに義援金が全国のＰＴＡから集まってきまして、それを被災した学校の優勝旗や盾を購入して差し上げた事業もあるのですけれども、その義援金を希望支援金という名前に変えて、年に１回３万円を上限にその姉妹指定校関係の交流事業のために支援している取組は、いまだに、なくなるまで続けるということをやっているので、どういった学校がいまだにつき合いしているかというのは、私は実は把握しているのです。逆に被災地に迷惑だから、そういった事業はやめようということで、もうつき合いとかもない学校もあるのですが、いまだにその関係は皆さん校長会も御存じですし、ＰＴＡもわかっているので、活用できますよね。

○熊谷雅英委員　ええ、今後とも続けていただきたいと思います。

○浅沼道成部会長　今の仕組みというのは、ほかにも応用がききそうな気がするのです。そうやって震災復興の分野でやってきて、これは成功したけれども、それは実は別の分野でこういう仕組みが生きて、うまく使っていけば、まさに岩手の個性として光るものになっていくような気がします。

それでは、もう時間ということで、あっという間でしたが、これで今日の意見交換会は終わりたいと思います。

（３）その他

○浅沼道成部会長　次に、（３）にその他がございますが、事務局お願いします。

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　参考資料ということで、次期総合計画の策定の方向性についてというパワーポイントの資料をつけておりますが、こちらは我々がさまざまな機会を通じて県民の方々への説明や次期総合計画づくりについての説明を行う際に使う資料ということで作成したものですので、時間のあるときにお目通しいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○浅沼道成部会長　ありがとうございました。それでは、時間ですので、ここで今日の会議は終わりたいと思います。進行を事務局にお返しいたします。

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　ありがとうございました。今日さまざまな御意見をいただきました。事務局にて取りまとめを行ってまいりますので、３回目の部会もどうぞよろしくお願いいたします。

次の部会ですが、２月 13 日、火曜日の午後を予定しております。正式には文書で御連絡差し上げますので、よろしくお願いいたします。

３　閉　会

○田澤政策地域部政策推進室主任主査　それでは、第２回部会は以上をもって閉会といたします。ありがとうございました。